

エッセー

想
片々

題字は書家・岩永西峰

<35>

戸口民也



とぐち・たみや 一九四六年神奈川県生まれ。一九七二年早稲田大学大学院仏文科修士課程修了。現在長崎外国語短期大学教授。専攻は一七世紀フランス文学・演劇。訳書にジャン・トゥーラ『ヨーロッパの核と平和』、『同』『死刑を問う』(いずれも三一書房刊)がある。西彼長与町。

Traduttore traditore」というイタリア語の警句がある。「翻訳者(トラーダットーレ)は裏切り者(トラディトール)」つまり、どんな翻訳も原文を忠実に伝えることはできず、どうしても原著者の意を裏切ってしまう、という意味である。

胸にくさりとくる警句だ。私の職業は短期大学のフランス語教師である。だから、フランス語を日本語に、また日本語をフランス語にうつす作業は日常茶飯事だし、ときには一冊の本をそっくり翻訳することもある。つまり、私も翻訳者のはしくれ、「裏切り者」の一人というわけだ。

でも詩は最悪だ。ご存じのように、一篇(ぺん)の詩と対するときに、私たちは、その詩を形づくっている言葉の意味だけではなく(あるいは意味以上に)言葉のもつ音や響きや

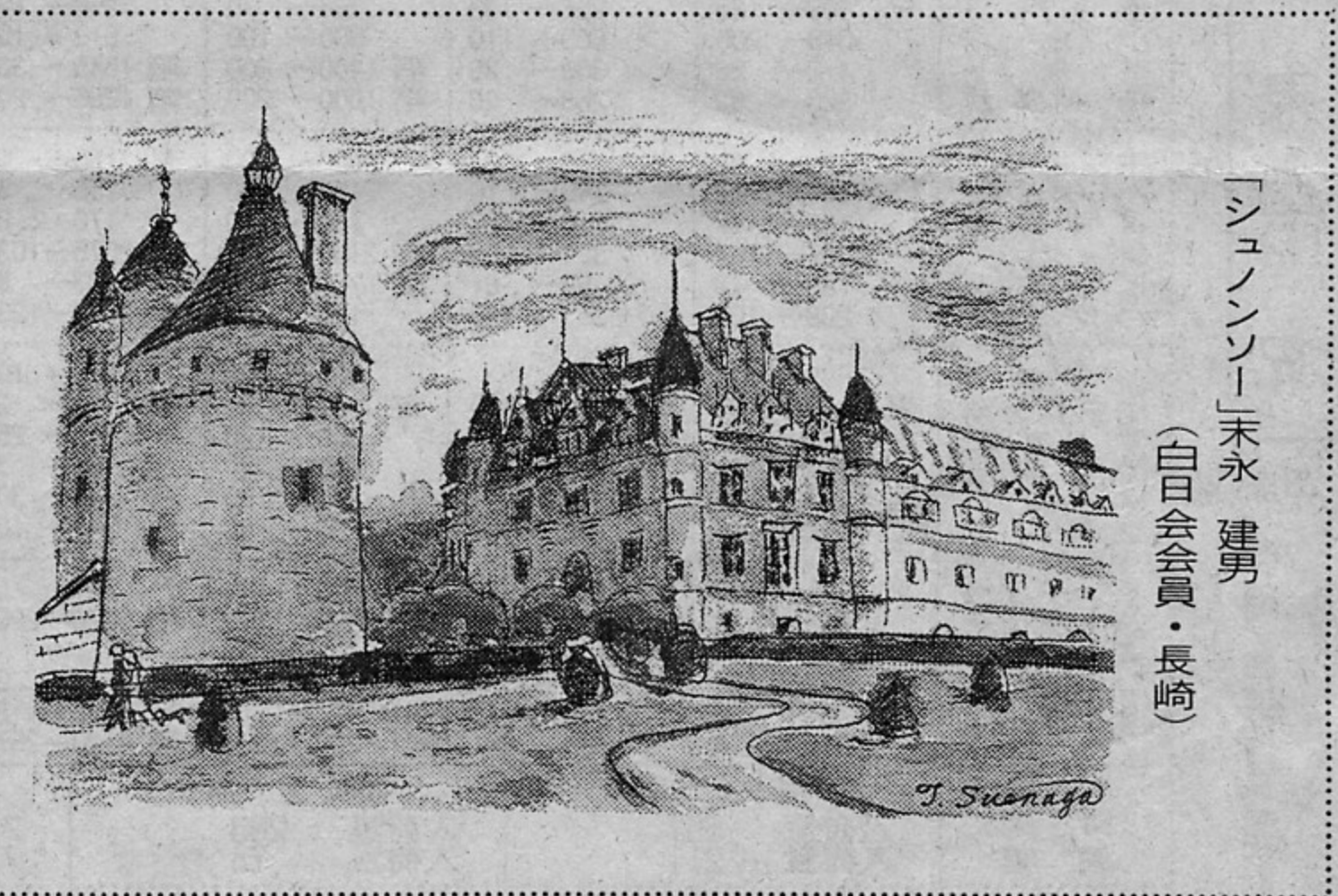
リズムも重要な要素として味わう。ところが音とか響きとかはまさに翻訳しようがないのである。だから「裏切り」の度合も、詩の翻訳のときが最もひどくなるわけである。

側(わき)の言葉に全然ないことがよくあるのだ。いや、たとえ単語とか表現が双方の言葉に存在していたとしても、「ずれ」はつねに起こりうる。ひとつだけ例をあげてみよう。

「croissant」というフランス語がある。「三日月」のことだが、カタカナにすれば「クロワッサン」つまり三日

の形をしたパンである。私たち日本人には、「三日」と「クロワッサン」とはまったく別の単語である。だから、この二つの語から連想するものも、それぞれ別だろう。しかも厄介なことに、フランス語の「croissant」からフランス人が抱くはずのイメージは、さらにまた違うのである。

フランス人にとってこの語は、歴史的にはイスラムとくにオスマン・トルコ帝国(とその旗印)を連想させるもの



「シユノンソー」末永 建男 (白日会会員・長崎)

し、決めたとたんにもとのフランス語がもっていた広がりも切り捨てざるほかないのである。

以上は、ほんの一例にすぎない。だが、ある言葉を別の言葉にうつそうとすると、今述べたようなことからはじまって、その他さまざまに困難にぶつかるのである。

翻訳者は裏切り者?

可能性を切り拓く努力必要

だから、言葉という気難しくて扱いにくい友とはうまく付き合わねばならない。そして、人に伝えようとする「メッセージ」があるのなら、そのメッセージを可能なかぎり正確に伝えようと努力することである。翻訳の場合にはさらに、メッセージが「言葉の壁をこえて」どこまで伝わるか、ということが問われるわけだ。訳者の力量もまさにそこで試されるのである。